

國學院大學學術情報リポジトリ

Popculture and religion : reincarnation in
animation and manga

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 研士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001439

ポップカルチャーと宗教

－マンガ・アニメにおける「生まれかわり」－

石井研士

「生まれかわり」への高い関心

若者の宗教性の動向を見ていると、近年、「生まれ変わる」「転生」「生き返る」といった用語で表現される事柄や観念への関心が高まっていることがわかる。世論調査を実施して年代別の相違を見ると、日本人の伝統的で代表的な宗教性を表すと考えられる「神」「仏」「先祖の霊」への関心については、二〇歳代は他の世代と比較して低くなっている。他方で、「天国」「地獄」「あの世・来世」「生まれ変わり」では、二〇歳代の回答が全体を大きく上回っているのである。⁽¹⁾

日本における死後の世界や霊の存在に関して、まず思い浮かべるのは祖先崇拜である。祖先崇拜は「家」の存在や「家」の記憶・慣習をもとに行われる儀礼から成り立っている。しかしながら若年層は、墓参りには行かず、自宅で仏壇を拜むこともしない。それにもかかわらず、死後の世界や霊の存在に関して高い肯定回答が示されるのである。要するに、若年層のこうしたものへの関心は、高齢者に保持されている祖先崇拜とは異なるものである。

若者はどこで「地獄」「あの世・来世」「生まれ変わり」に関する知識や情報を獲得するのだろうか。しかも「関心がある」という段階にまでである。学校教育でこうした知識を得る機会はなく、地域社会の中で自然と身につくものではない。また仏壇や神棚の保有率の低下をはじめとして、家庭における儀礼文化の喪失は明らかになっている⁽²⁾。

大学での演習や学生に課すレポートを通じて実感するのは、いわゆるポップカルチャーを通しての宗教に対する関心の高さや潜在性である。身近な宗教性に関する課題を与えたときに、アニメやマンガの宗教性をテーマに取り上げる学生が少なくない。あるいは「これまでに読んだ（見た、やった）マンガやアニメ、RPG（ロールプレイングゲーム）で面白かったものを三点挙げ、それぞれどのような宗教性があるかないか論述しなさい」といった課題を出すと、大半の作品に宗教性が見いだせるというレポートが続出する。もっとも、「宗教学」の課題であるから、たとえ「宗教性が感じられない場合は「なし」と記述」とはしていても、受講生は書きやすいものを選択するであろうし、積極的に宗教性を見い

だそうとするだろう。

研究者の中には、ポップカルチャーの中にさまざまな宗教性が見いだせると、現代社会における宗教の存続を強調してみせる者もいる。⁽³⁾ しかしながら、あらためて自分が面白いと感じたり、あるいはそれなりに影響を受けた作品を思い浮かべた時に、ことさら宗教的と思われる作品が思い浮かぶだろうか。

マンガやアニメ、ゲームには、キャラクターやストーリーなど、多くの作品に宗教的と思われる要素を見ることはできる。他方で、そうした要素を前面に打ち出すことで作品が幅広く受容された、というようにはいえないだろう。しかし一方で、そうした宗教性は強く自覚されないままに、若者の間に浸透していることも十分に想定される。

この曖昧な関係の糸口を解くために、本論文では「転生」「生まれ変わり」をテーマやキャラクター設定に重要な意味を持つと考えられる作品を取り上げることで、ポップカルチャーと宗教の関係を考察したいと思う。

転生騒動

その時代の精神や雰囲気とシンクロするような作品が生まれることがある。「もののけ姫」や「新世紀エヴァンゲリオン」⁽⁴⁾、最近であれば「君の名は。」など、たんに作品の面白さを超えて、ブームとなり多くの人々の心を掴むことがある。作者や制作者はそうした事態を予想したわけではないが、時代の影響を受け、何物かを表象してしまった作品が生まれたということなのだ考える。



『ぼくの地球を守って』(日渡早紀)もそうした作品のひとつである。『ぼくの地球を守って』は1986年から1994年まで、白泉社の『花とゆめ』という少女マンガ雑誌に掲載されたマンガである。今でこそ一部のファンの間でしか認知されていないと思われるが、発表後、熱狂的な支持を受け、若い人たちの間に広まりつつあった前世ブームに火を付けた。

物語は、東京の高校に転入した女子高生が、前世では異星人の科学者であり、「Z-KK101」と呼ばれる月の基地で、五人の仲間と共に地球を見守って暮らしていたという記憶を取り戻す。地球人に転生した仲間を探すなかで事件が起きる…という内容である。

マンガの中で仲間を捜すために雑誌の読者連絡欄で呼びかける場面がでてくる。同じことが超常現象や人類滅亡などオカルトを扱った雑誌『ムー』(学習研究社)や『トワイラ

イトゾーン』(KK ワールドフォトプレス)の読書欄で起こり、話題になったのであった。

引用した雑誌の誌面にもあるように、日渡ヘファンレターを送ってくる読者のあまりの真剣さに、作者の日渡早紀は自らの連載マンガの中にコメントを設けて違和感を述べている。

”街中でももしかしたら輪(執筆者注:地球に転生した主要な登場人物の一人)とすれ違う瞬間があるんじゃないかって思ったりする””月を見てたら、あーあそこには木蓮さんたちの亡きがらが眠っているんだなあ…なんてボンヤリ考えていた”-といったご感想が多く届いています。なんだか日渡自身も妙~な気分になってまいりますよ。…フィクションって疑似体験なんですねー(汗マーク)”輪の夢を見たんですよ。例のマンションの前で『地球を守って…』と言いながら泣いてるんです。そしたら、風が吹いて緑がざわわわいて、声になるんです。『ありすがいるから、大丈夫だよ…………』”手元に届く皆さんの感想が、ものすごいんです。なんだか、どれも全部イメージの塊で…。いやはや震撼ものです(汗マーク)『ぼくの地球』が皆さまのイメージの海をゆらしてるとは思いますが。な…なんか、怖いくらい。ど、ど、どーしよう(汗マーク)。(5)

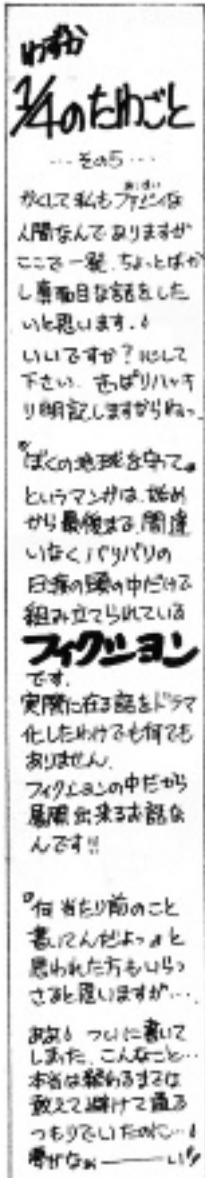
あまりの過熱ぶりに、『ムー』は1988年6月号から、読書欄に前世の仲間探しに関する投稿を載せない方針を打ち出した。しかしながら同系統の雑誌には同じ種類の投稿がいざんとして相次いだ。

こうした状況の中で事件が起こった。1989年8月16日午後9時少し前、徳島市の路上で中学二年生二人と小学校五年生の三人が倒れているところを発見されたのである。三人は鎮痛解熱剤を服用して自殺を図ろうとしたものであるが、手に筋書きを書いた予定表を持っていた。もともと死ぬ気はなく、自殺を図るが結局は助かるという筋書きの予定表であり、「自殺ごっこ」と報道された。(朝日新聞、1989年8月17日)

この不可思議な事件は、すぐに週刊誌が追いかけることになった。週刊誌によれば事件は以下のようになる。

1989年の夏休み、「エリナ」や「ミルシャー」の生まれ変わりだという女の子たちが、前世を見るために自殺騒動を起こしました。

なんでも、「みんな、前世は美しいお姫様だった。楽しそうな前世をのぞくには、一度死んでみればいい」と考えたそうで、3人の女の子たちは映画館で『魔女の宅急便』を見てから海岸に行き、1人がバファリンを8錠、もう1人がバファリンを1錠飲み、最後の



1人は何も飲まずに「女の子が倒れている」と119番。救急隊員が駆けつけたときには3人とも倒れており、現場には『シークエンス』の単行本があったそうです。

警察署の係官は、「本気で死ぬ気だったようです。でも、我々が考えているような死ではなく、死んでも、また今の世の中に戻ってこれると信じていた」と述べました。（『週刊新潮』89年8月31日号25頁）

文中の『シークエンス』（新書館）は、1989年8月1日に発売されたみずき健の1巻本のマンガである。幼なじみが引越してきて「自分には前世の記憶がある」といったのを契機に、主人公にも前世の記憶が蘇る。二人は前世で知り合いであり、記憶だけでなく超能力も甦る。さらに、二人が過去の記憶だと思っていたものは、未来の世界の記憶であることが判明し・・・というストーリーで展開する。

ところで、日渡早紀は1989年12月出版の『ぼくの地球を守って』の中で、作品がフィクションであることをわざわざ断っている。

”ぼくの地球を守って”というマンガは、始めから最後まで、間違いなくバリバリの日渡の頭の中だけで組み立てられているフィクションです。

当時の若者の文化的状況を毎日新聞は「滅びの世界 「夢」の中に友ととめ・・・」としてルポルタージュした。キーワードは、若者の孤独と「ふれあい」である。

不思議な閃光が少女の体を貫いた。

二年前の春。京都の名刹・東寺講堂。修学旅行中の東京の女子高生、エミ（16）は「不動明王」の彫刻の前でクギ付けになった。

右手に剣、左手に縄索を握った忿怒の像。それを見たとき、未来に「トリップ」した。世界が音を立てて崩れるイメージ。続いて、インスピレーションがひらめいた。「地球が危ない。“戦士”になって地球を守るんだ」。理屈じゃなく、体でそう感じた。

二ヶ月後、オカルト雑誌の投稿欄に手紙を書いた。

《仲間を探しています。最終戦争（ハルマゲドン）に関わりのある方。エスパー（超能力者）

の方。戦士の私に連絡ください。》

十五人から手紙が来た。九割が女性。エミとほぼ同年齢の女子高生が七人。女子中学生四人。二十歳の女子大生もいた。みんな「何か」を探していた。エミも全員に返事を書いた。数人とは実際に会って、喫茶店や図書館でじっくり話し込んだ。好きなアニメのこと、男の子のこと、そして地球や環境のこと…学校では友人も少なく、孤立したタイプの子が多かった。

「環境破壊はものすごいスピードで進んでる。どうせ地球を救えないなら、徹底的にこわしちゃったほうが…。それから出直しても、遅くはないわ」。エミが言うと、みんながうなずいた。

……略……

エミは東京の下町生まれ。おかっぱの髪に、ぽっちゃりした顔。両親と祖父母、弟の六人家族。ごく普通の家庭だ。有名私立女子大の付属中学からエスカレーター式で高校に進んだ。学校で文芸サークルを主宰、自ら小説も書く。……

エミに手紙を書いた一人に大学生のマサキ（二〇）がいる。西洋魔術に凝っている。ユングをはじめ心理学の本も読みあさった。昨年夏、渋谷の喫茶店でエミと待ち合わせた。一時間ほどの会話で、エミは「仲間を探してるの。一緒に戦わない」と何度も口にした。「結局寂しいんだ。安住できる場所を探しているようだった」。マサキが振り返る。

福島的女子高生、マリ（一六）は授業中、不思議な「体験」をした。意識がスーッと薄れて、心と体が離れていく。夢のような状態。宇宙服を着て、だだっ広い空間をさまよっていた。「泣き出したい」ほどの孤独感。ひとりぼっちのマリは、女の子一人と四、五人の男の子に助けられた。そこで意識が戻った。自分を「救ってくれた」子を探し出そうとして雑誌への投稿を続ける。

…（略：徳島市での小中学校女の子三人の鎮痛解熱剤による「自殺ごっこ」への言及）…

人と人が向き合わず、「モノ」と対峙しがちな現代。それでも、若者たちは「ふれあい」を求めて漂う。（毎日新聞（東京）、1990年1月4日）

手塚治虫『火の鳥』にみる輪廻転生

輪廻転生とマンガとの関わりを考えると、すぐにも多くの人の念頭に浮かぶと思われるものがある。手塚治虫の描いた長編『火の鳥』である。しかしながら手塚の『火の鳥』は、1980年代に突如としてブーム化した前世への、とくに少女たちの関心とは異なるものである。



『火の鳥』がはじめて掲載されたのは1954年（昭和29年）のことであった。その後、複数の雑誌に掲載されながら、最終の「太陽編」が『野性時代』に掲載されたのは1986年のことだった。『火の鳥』は全12編からなる、古代の3世紀から宇宙時代の3400年にいたる壮大な物語である。物語には「火の鳥」と呼ばれる鳥が登場する。火の鳥の血を飲めば永遠の命を得られるという設定となっている。長編であるために多くの主人公が登場するが、彼らは火の鳥と関わりながら運命に翻弄され続けるのである。

本論の目的に沿ってだけ『火の鳥』を論じることにするが、『火の鳥』が輪廻転生を描くマンガとしてよく知られているのは、おおよそ二点による。ひとつは、手塚治虫自身が作品の中で、輪廻転生について語るからであり、今ひとつは、壮大な歴史であるにもかかわらず、同じキャラクターが輪廻転生のテーマに沿ってたびたび登場するからである。



『鉄腕アトム』に登場するお茶の水博士とよく似た、大きな鼻をしたキャラクターが重要な役割を担って繰り返し登場する。『黎明編』で初登場した猿田彦は無数の吹き出物のある大きな鼻を持ったキャラクターである。猿田彦はクマソを滅ぼす勇猛な戦士である。

この猿田彦は次の『未来編』ではさまざまな生命を培養する世捨て人の博士として登場する。時間はすでに3千年以上たっている。第4編の『宇宙編』では猿田彦のみにくい鼻の理由が語られる。それは人を殺した業によるものであるという説明がなされる。奈良時代の出来事を描いた第5編『鳳凰編』では片腕の盗賊・我王で、旅の僧・良弁の教えによって仏師となる。仏師の我王は輪廻転生の苦しみと怒りを鬼瓦制作につける。そして良弁の死によって人の世の無常を知り悟りを得る。（我王は第9編『乱世編』で鞍馬の天狗として登場する）第11編『異形編』では病気で鼻が見にくく腫れ上がった八儀家正である。八儀は残酷な人物で、『鳳凰編』の世の無常と悟った我王の面影はない。

『火の鳥』は刊行順と物語の進行が異なっている。12編を時系列に並べると『黎明編』が最初で『未来編』が最後となるが、物語は『未来編』の最後がそのまま『黎明編』に繋がるようになっており、その意味でも輪廻が強く意識された構造となっている。

先に、『火の鳥』は1980年代に突如としてブーム化した前世への関心とは異なるものである、と記したが、両者を比較してみればすぐにもわかる特徴がある。それは、猿田彦は自らの輪廻転生や業に苦しみながらも、自分が誰の生まれ変わりであるかは知らないのである。他方で、前世少女たちは、自ら「○○の生まれ変わり」「○○の記憶がある」と主張する。

「輪廻転生」をモチーフとするマンガ



80年代の輪廻転生ブームに大きく関わることになったと考えられる『ぼくの地球を守って』出版の少し前から、「輪廻転生」と思われるモチーフを持ったマンガ・アニメが少なからず制作されて現在にいたっている。先述した「転生騒動」で少女たちがもっていた『シークエンス』もそうした一連の作品のひとつである。

ところで、ここまで分析を進めるときに、「転生」「生まれ変わり」「輪廻転生」を定義することなく用いてきた。これらは定義の上でも異なるものであるし、現状の分析に置いても、質的に異なるものである。

学術用語として明確なのは「輪廻転生」である。「<輪廻>とも書き、<輪廻転生>ともいう。…車輪が廻転してとどまることのないように、次の世に向けて無限に生死をくり返すこと。…生前の行為と転生後の運命が因果的に結びつけられ」た世界観である⁽⁶⁾。」輪廻転生は業や因果応報といった概念と結びついている。少なくとも、自らが「○○の転生」などという自己理解などではない。

『ぼくの地球を守って』の頃から現在まで、このテーマを扱ったマンガ・アニメを列挙すると次表のようになる。⁽⁷⁾

図表 「生まれ変わり」を含むマンガ

掲載開始年	タイトル	巻数	テレビ放送開始年	備考
1975	手天童子	9		
1975	悪魔の花嫁	17		
1976	暗黒神話	1		
1976	パウパウ大臣	1		
1978	海のオーロラ (少女漫画)	8		
1982	ときめきトゥナイト	30	1982	
1983	真珠姫	2		
1985	孔雀王	17		
1985	黄門★じごく変	2		
1986	イティハーサ	15		
1986	聖闘士星矢	28	1986	

掲載開始年	タイトル	巻数	テレビ放送開始年	備考
1986	天よりも星よりも	8		
1987	アリーズ	20		
1989	悪魔の黙示録	30		
1991	嵐のデスティニー			
1991	GS美神 極楽大作戦!!	39	1993	
1991	十兵衛紅変化	8		
1992	美少女戦士セーラームーン	18	1992	第17回 講談社漫画賞少女部門受賞
1992	八雲立つ	19		第21回 講談社漫画賞少女部門受賞
1993	輝夜姫	27		第47回小学館漫画賞
1993	爆れつハンター	13	1995	
1994	ギルグリム - 転生	2		
1994	幻影夢想	5		
1994	天使禁漁区	20		
1994	炎の蜃気楼	5	2002	
1995	Wish (漫画)	4		
1995	密・リターンズ!	7		
1995	未来のうてな	11		
1995	烈火の炎	33	1997	
1996	妖しのセレス	14	2000	第43回 (平成9年度) 小学館漫画賞
1996	犬夜叉	56	2000	第47回 (平成13年度) 小学館漫画賞
1996	ZERO (やまざき貴子)			
1996	VS騎士ラムネ &40炎	26		
1996	遊☆戯☆王	38	1998	
1996	龍王魔法陣	3		
1997	CUFFS ~傷だらけの地図~	2		
1997	天上天下	22	2004	
1998	下弦の月	3		
1998	神風怪盗ジャンヌ	7	1999	
1998	シャーマンキング	32	2001	
1999	カムナガラ	10		
1999	Dr. リンにきいてみて!	8	2001	
1999	ぴたテン	8	2002	
2000	一騎当千	24+	2010	
2000	おとぎストーリー 天使のしっぽ		2001	
2000	幻獣の星座	14		
2001	GLOBAL GARDEN	8		
2002	あなたがいれば (漫画)	8		
2002	現神姫	9		
2002	月下の君	7		
2003	恋する魂	1		
2004	カミヨミ	15		
2004	神無月の巫女	2	2004	
2004	創竜伝	5	1991	
2005	裏切りは僕の名前を知っている	11+	2010	
2005	こぼと。	6		
2005	昭和不老不死伝説 バンパイア	10		
2005	殲鬼戦記ももたま			
2005	ボクを包む月の光	15		
2005	桃組プラス戦記	15		
2006	NG ライフ	9		
2006	黒の李氷	7		
2006	外道坊	6		
2006	しはるじえねしす	6		
2007	アリーズ2 ~蘇る星座宮~	10		

掲載開始年	タイトル	巻数	テレビ放送開始年	備考
2007	一年生になっちゃった	9		
2007	海の御先	15		
2007	近未来不老不死伝説バンパイヤ	5		
2007	地平線でダンス	5 +		
2008	カブキ-蒼の章	1		
2008	純★愛センセーション			
2008	ボクラノキセキ	14		
2009	妖狐×僕SS	11	2012	
2009	機巧童子 ULTIMO	12		
2009	境界のRINNE	31+		
2009	シュトヘル	12		
2009	来世であいましょう	4		
2010	亭主元気で犬がいい	8		
2011	あやかし緋扉	12		
2011	ハスクール D × D	8 +		
2011	はじまりのいいな	4		
2011	私は利休	4		
2012	犬とハサミは使いよう	4		
2012	スピリットサークル	6		
2012	つぶつぶ生活	5		
2012	七つの大罪（漫画）	21+	2014	第39回講談社漫画賞・少年部門
2012	マジ！！ペンテン	5		
2013	十忍法魔界転生	9		
2014	聖剣使いの禁呪詠唱	6	2015	
2014	懲役339年	4 +		
2014	斎女伝説クラダルマ	14+		
2015	織田シナモン信長	1 +		
2015	この素晴らしい世界に祝福を！	3 +		
2015	チカカラチカ	1 +		
2015	てやんでい Baby	7		
2015	転生したらスライムだった			
2015	ファタモルガーナの館	1 +		
2015	和おん！	2 +		

(+) は刊行中であることを示す

リストには、巻数にも反映されていると考えられるが、人気作品と短命で終わったものがランダムに混じっている。「備考」に記したように、賞を受賞している作品が複数見られる。アニメ化された作品は人気作品と考えていいだろう。

ところで、本論文のテーマに沿って論を進める際に、これらすべてをひとつひとつ論じる必要はないと思われる。まず分析の対象とすべきは、多くの読者を獲得した作品、アニメ化された作品、賞を受賞した作品等である。これらを中心に分析を進めることにしたい。

調べた限りでは、「生まれ変わり」や「転生」をモチーフにしたマンガは1970年代半ばからすでに存在している。

先にも指摘したが、詳細に調べていけば、膨大な量のマンガやアニメの中には、さらに刊行の早い作品があるかもしれないが、おおよそ関心のある者の中で「知られた」作品でヒットしたマンガとして知られているのはものとして、『悪魔の花嫁』（原作・池田悦子、

作画・あしべゆうほ)を挙げることができそうである。秋田書店から刊行された少女向け雑誌『月刊プリンセス』に1974年12月から連載が始まり、以後媒体を変えながら長期間にわたって掲載が続いた。

『悪魔の花嫁』について本論文に関係する部分だけ要約すると次のようになる。いつの時代か、妹のヴィーナスと相思相愛になったデイモスは大神(ジュピター)の怒りを買い天界から追放されて悪魔となる。妹は黄泉の国に落ち生きながら身体が朽ちていく。デイモスは妹を救うためには妹の生まれ変わりである伊布美奈子の体にヴィーナスの魂を入れなくてはならない。一話完結のストーリーが時代や地域を越えて繰り返しられるが、どの時代やどの地域においても主人公たちが関係性を持って描写される様子は、シャーリー・マクレーンの『アウト・オン・ア・リム』に代表される一連のスピリチュアリズムの概念である「ソウルメイト」を連想させる。

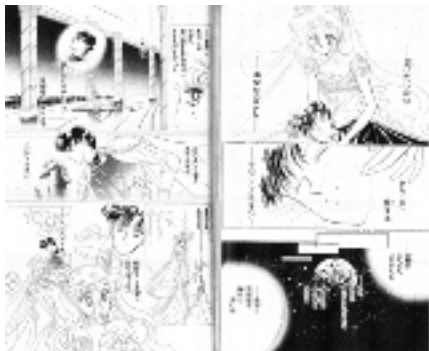


「自覚する」、もしくは「記憶」を取り戻す

これまでの説明で「記憶」が重要な意味を持っていることを指摘してきたが、すでに『悪魔の花嫁』でも作品の設定として現れている。

デイモスは美奈子に告げる。「かならず私を思い出させてみせる まずは金曜日の午後一時におまえにあいに行くことにしよう そのときおまえは自然や科学では説明のつかない呪いを悪霊の恐怖を体験する そうしていつかおまえの記憶はよみがえりわたしたちはまた いっしょになれるのだ」⁽⁸⁾

このように夢や失神していた間に見た「記憶」が「生まれ変わり」の根拠となる点は、多くの作品に共通している。まずは「記憶」以外の事例も含めて、主要な作品を見てみたいと思う。分析の中心は、「どのようにして自分は誰かの生まれ変わりだと認識したか」、その結果、どのようなことが起こったのか、の二点である。



先に紹介した『ぼくの地球を守って』は、東京の高校に転入した女子高生が、前世では異星人の科学者であり、「Z-KK101」と呼ばれる月の基地で、五人の仲間と共に地球を見守って暮らしていたという記憶を取り戻すことから物語は始まる。主人公の女子高生・坂口亜梨子は卒倒して夢を見る。夢の中で

は木蘭と呼ばれ、月の基地から地球を見守っている。

『美少女戦士セーラームーン』（1992年）も同様である。敵の攻撃を受けてタキシード仮面が倒れたのを見たセーラームーン（月野うさぎ）は、自分が月の女神プリンセス・セレネティであり、タキシード仮面が地球国の第一王子エンディミオンであったことを思い出す。

精霊による告知もしくは認知

自分が特殊な役割を背負った存在であることを夢などを通して知る以外に、マンガやアニメでは精霊や小動物を通して告知されるパターンが存在する。人気の点でもよく知られているのは『セーラームーン』に登場するルナである。

ルナは額に三日月の模様がある黒猫の姿をしている。ルナはある日、月野うさぎの前に姿を現し、うさぎが選ばれた戦士であり使命があることを告げる。ブローチを与え変身の文句である「ムーン・プリズム・パワー」を伝える。うさぎは変身してセーラームーンとなり、記憶を取り戻すためのきっかけを作る。



月刊少女漫画雑誌『りぼん』の1998年2月号から連載されて人気を博し、テレビでも放映された『神風怪盗ジャンヌ』では、精霊が生まれ変わりであることをよりはっきりと保証している。

主人公の高校2年生・日下部まろんの前に、准天使のフィン・フィッシュが現れる。フィンはまろんに向かって「はじめまして まろん



私は准天使フィン・フィッシュ あなたを探してここまできたの あなたの力が必要なのよ」と伝える。出会ってから一ヶ月後の場面でフィンは叫ぶ。「まろん!! 1か月もやってるのにまだわかってないみたいだね 魔王がひそませた絵画の中の悪魔を回収できるのはジャンヌ・ダルクの生まれかわりであるまろんだけなんだよ!」

小動物や精霊は何も「生まれ変わり」にだけ登場するわけではない。ドラえもんも含めて多様な作品の中で重要な脇役として存在している。

集団による認知という方法もある。本人の申告を周囲が本物と認めるのである。

1980年代後半に大ヒットとなった『聖闘士星矢』（車田正美）の主要な登場人物が、ギ

リシャ神話の女神アテナの転生という設定で活躍する。『聖闘士星矢』はギリシャ神話をモチーフにしたマンガである。250年に一度出現する冥界の神ハーデスとの闘いにそなえて、女神アテナの化身とアテナを守るために闘う聖闘士（セイント）が地上に現れる。星矢は聖闘士の一人である。



アテナは冥界の神ハーデスとの闘いを予期してアテナ神殿の奥深くに赤子となって降臨する。赤子は日本の大富豪グランド財団の総帥城戸光政の孫娘・沙織として育てられる。沙織は財閥のお嬢様としてわがままいっぱいにつが、城戸光政の遺言で自らの正体とその使命を知る。後にアテナとして覚醒して前世の記憶を取り戻すのであるが、どのようにして覚醒したのかは描かれていない。本人が「アテナ」として自覚し「アテナ」として振る舞うのである。この作品でも本人の自覚が鍵となっている。そして、沙織を「アテナ」の化身であるとする集団・聖闘士がいる、という構造になっている。

変身そして不思議な力の発動

本人が記憶を取り戻したり、何らかの働きで生まれ変わりを自覚した時に何が生じるのだろうか。基本的に生じるのは三つである。特別な力の獲得（変身）、与えられた使命（敵）、そして小集団（仲間）の形成である。本人の自覚（記憶）が先の場合が多いように思われるが、特殊な仲間の働きかけによって記憶が甦ったり、アイテムを用いた変身によって使命を自覚し記憶が甦るなど、組み合わせや順序は多様である。



特別な力の獲得は作品によっていろいろである。特別な力を備えた存在になったことがわかりやすいように変身するのが通常である。日常的な服装や髪型は廃棄せられる。少女漫画の場合にはとくにコスチュームがきらびやかになり、髪型が通常はあり得ない様態を取る。女性らしさが強調される点も留意されていだろう。他方で男性の場合は、戦闘服や、場合によってはロボットと合体するなど、「力」の拡大・誇示が特徴ではないか。マンガやアニメにおける「変身」は、本論文のテーマである「生まれ変わり」と関わりながらも、独立したテーマとして立てることができると考えている。

特殊な能力が特別な使命と密接に結びついていることは明らかである。特殊な能力は使命を果たすための武器であり、換言すれば、敵対者を想定することではじめて超能力や変身や自らが聖なる存在の生まれ変わりであることが意味を持つようになる。同じ記憶を共

有する仲間と出会い、お茶を飲んで会話を楽しむだけでは物語は成立しない。

渡瀬悠字作の『妖しのセレス』は小学館『少女コミック』に1996年から掲載された。2000年にはテレビ放映もされた人気作品で、第43回小学館漫画賞を受賞している。

羽衣伝説をモチーフにした作品である『妖しのセレス』の主人公・御景妖は16歳の誕生日に親戚一同が集まるなか「天女のミイラの手」を見せられる。妖に血の影像が見え、一瞬にして目と髪の色が変わる。天女の力の発露の衝撃で服が破れ、「ミイラの手」もバラバラに吹っ飛ぶ。目は赤くなり、髪は茶髪から黒髪へと変わる。妖は予知能力を持ち、宙に浮くことができる。衝撃波（人間を一瞬で溶かすことも可能）が出せるようになり、異空間を作り出して敵と戦う。



『犬夜叉』は1996年から小学館『週刊少年サンデー』で連載が始まった人気作品である。作者の高橋留美子はこれまでに『うる星やつら』『めぞん一刻』『らんま1/2』などのヒット作を描いた人気作家である。数多くの賞を受賞している。

『犬夜叉』の主人公・日暮かごめは15歳の中学3年生である。実家が神社である以外はごく普通の中学生である。ある日境内に祀られた祠の中にある骨喰いの井戸を通じて戦国時代へとタイムスリップする。そこで犬夜叉と出会い、すべての願いが叶うという四魂の玉を争って物語が進んでいく。



公式 HP より

かごめは500年前の戦国時代の巫女・桔梗の生まれ変わりとされる。本人に自覚はないが、周囲の者が桔梗として認知し、その結果生まれ変わりを認めるようになる。桔梗の妹の楓に「姉さまに似ている」「お前は桔梗姉さまの生まれ変わりだ」と言われる。楓もまた灵力を備えた巫女である。半妖怪の犬夜叉にも「あの女と同じにおいがする」といわれる。かごめの体内からは桔梗が守った四魂の玉が脇腹から現れる。聖痕である。

かごめは戦国時代に移ってから不思議な力を獲得する。誰にもできなかった犬夜叉の封印を解き、鎮魂の言葉（たましずめのことば）によって犬夜叉をコントロールすることができる。敵の妖気や妖力の気配を感じ、弓矢で妖怪を倒す。弓矢によって邪気を浄化することができる。妖怪の体のどこに四魂の玉のかけらがあるかがわかる、といった能力を獲得する。

かごめは変身しない。戦国時代へ移ってもセーラー服である。しかし、戦国時代のセーラー服は変身した服装と変わらない意味を持つだろう。かごめの戦国時代でのセーラー服

以外の服装は、犬夜叉と生きることを決めて現代から戻ってからの巫女装束だけである。巫女としての力を発揮するときには、セーラー服か巫女の装束ということになる。

「使命」は地球や人類の救済を始め、親友や両親などを死から守るなど、作者は多様な状況を設定している。眼前に現れる「敵」はさらに多様で、友人・知人から始まり化け物、あるいは宇宙人、宇宙の法則、運命など、作者の腕の見せ所なのだろう。

仲間

小集団（仲間）の形成の重要性は強調しておきたい。たとえ主人公が孤独なヒーローのように見えても、主人公を理解し助ける仲間（恋人）の存在は不可欠である。むしろ仲間の獲得こそが中心的なモチーフである作品も少なくない。仲間が反発や対立を繰り返しながらも、時にはバカな仕業によって大騒ぎを繰り返しながら、物語が進んでいくのが通常である。

『セーラームーン』の5人の戦士、『犬夜叉』の旅する一行など、どの作品にも少数の濃密な関係で結ばれた登場人物が存在する。



『妖狐×僕 SS』は藤原ここあによるマンガで、2009年からスクウェア・エニックスの『月刊ガンガン JOKER』（創刊号）に連載された。2012年1月からはテレビでも放送された人気作品である。

旧家である白鬼院家の令嬢として生まれた白鬼院凜々蝶は、常に家名の由緒が優先される環境に息苦しさを感じ、家を出て一人暮らしをすることにした。家を出る条件として、妖館と呼ばれている厳重な審査をクリアした者しか入居を許されない高級マンション「メゾン・ド・章榿（あやかし）」への居住を命じられる。

白鬼院凜々蝶は普段は普通の高校生として暮らしている。自分が「鬼」の先祖返りであることは自覚している。始祖（や前世）の記憶を受け継いでいる。変身するとコスチュームが変わり制服が和服っぽい衣装になる。髪に牡丹の花、剣が現れて妖怪と闘うことになる。



『妖狐×僕 SS』は時間的なループも含む作品であるが、白鬼院凜々蝶が住むメゾン・ド・章榿での住人とのコミカルなやりとりや、すれ違う恋などが丹念に描かれている。住人である御狐神双熾、反ノ塚

連勝、雪小路野ばら、髑々宮カルタ、渡狸卍里、夏目残夏や妖怪従業員とのやりとりが高級マンションという狭い空間で描かれる。

おわりに

マンガやアニメは商業的に成り立たなければ連載を続けることはできない。それゆえに、いかに独創的芸術的な作品でも読者に受け入れられなければ継続できないことになる。それゆえに「人気作」は、微妙なバランスをとりながら、作者（編集者）の創作と受容者である読者の間で生まれたものである。先に示した一覧表からもわかるように、繰り返し「生まれ変わり」をテーマにした作品が輩出されてきたことは、受容者である読者が望んだ結果であるということも可能であろう。

「生まれ変わり」をテーマとしたマンガ・アニメは、当時の文化的状況の影響を受けたか、それとも共振しながら確実に現在まで生き続けている。少女マンガに多く見られるテーマであるが、少年誌にもないわけではない。若者一般に広く浸透したフレームワークと考えていいだろう。

平成28年8月下旬に封切られた劇場用アニメ『君の名は。』（新海誠監督）は、配給元の予想を超えて大ヒットした。封切り以降、8週連続で週末観客動員数1位をキープし興行収入は200億円を突破した（平成28年12月9日現在）。公式ホームページに記載されたストーリーを要約すると以下のようなになる。

千年ぶりとなる彗星の来訪を一か月後に控えた日本。山深い田舎町に暮らす女子高校生・三葉は憂鬱な毎日を過ごしていた。町長である父の選挙運動に、家系の神社の古き風習。小さく狭い町で、周囲の目が余計に気になる年頃だけに、都会への憧れを強くするばかり。

そんなある日、自分が男の子になる夢を見る。見覚えのない部屋、見知らぬ友人、目の前に広がるのは東京の街並み。念願だった都会での生活を思いっきり満喫する三葉。一方、東京で暮らす男子高校生、瀧も、奇妙な夢を見た。行ったこともない山奥の町で、自分が女子高校生になっているのだ。繰り返される不思議な夢。そして、明らかに抜け落ちている、記憶と時間。二人は自分たちが入れ替わっていることに気づく。

いく度も入れ替わる身体とその生活に戸惑いながらも、現実を少しずつ受け止める瀧と三葉。残されたお互いのメモを通して、時にケンカし、時に相手の人生を楽しみながら、状況を乗り切っていく。

しかし、気持ちが打ち解けてきた矢先、突然入れ替わりが途切れてしまう。

入れ替わりながら、同時に自分たちが特別に繋がっていたことに気付いた瀧は、三葉に会いに行こうと決心する。辿り着いた先には、意外な真実が待ち受けていた……。

ところで、『君の名は。』が生まれ変わりの物語ではないかという指摘がネット上で指摘されている。RADWIMPSによる主題歌『前前前世』が「君の前前前世から僕は 君を探し始めたよ」で始まることも手伝って、単に入れ替わりだけでなく、時間の変化、パラレルワールド、などの解釈が可能なのである。この映画では自身の前世、来世（一世代に限らない）の夢を見る、夢を見ている間、人格の入れ替わりが起こる、その夢が現実改変に繋がるといった内容を含んでいる。



公式 HP より

日本映画の歴代興行収入のベスト5に入る映画に、これまでマンガやアニメで繰り返し見られた「生まれ変わり」のテーマが見られるとしても、けっして不思議なことではない。

平成25年度と26年度の二年間、都内の複数の大学に通う大学生に、アニメ・マンガと宗教の関係について600通以上のレポートを書いてもらった。レポートのテーマはテキストの宗教の定義に関する章を読んだ上で、「これまで読んだり見たマンガ、アニメの中でもっとも印象に残った作品を三点挙げて、それらが宗教性を有しているかどうか論じなさい」というものである。⁽⁹⁾

本論で取り上げた作品を挙げた学生が少なからずいるが、学生が「面白い」と感じている点や宗教性は、本論で説明した内容とは明らかに異なっている。期待されるような、「生まれ変わり」についての強い印象や憧れが直接語られることはない。それでも、本論で見てきたように、繰り返し「生まれ変わり」が作品の重要な構成となっており、そうした作品が人気を集めたことを考えると、読者の関心や認知は別にして、マンガやアニメといったメディアが「生まれ変わり」を若者の間に浸透させているという事実は指摘できると思う。その「生まれ変わり」は仏教的でも、日本人がかつて生活の中で維持してきたものでもない。「生まれ変わり」が死後の世界観を含む宗教的世界観であるとするれば、現代社会においてこうした世界観を下支えしているのは明らかにメディアである。読者の関心と商業的な思惑の中で視覚的な効果を伴って微妙な形で存続している宗教的世界観は、今後もこうした形で維持そして変容していくにちがいない。

注

- (1) この点に関しては石井研士『平成二二年度～二四年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 調査報告書 世論調査による日本人の宗教性の調査研究』(平成二三年、12頁)、石井研士『増補改訂版 データブック現代日本人の宗教』新曜社』(平成19年、新曜社)を参照。なお石井研士「現代における「よみがえり」考」(『國學院雑誌』第123巻、第8号、1～16頁)をあわせて参照。
- (2) 石井研士『日本人の一年と一生』参照。
- (3) この点に関しては、石井研士「宗教とポップカルチャー序論」(『國學院雑誌』第116号、125-141頁)参照。
- (4) 1995年10月からテレビ放送されたアニメ。1997年には一大ブームとなり熱狂的なファンを生み出した。主人公である一四歳の少年少女三人が巨大人型兵器エヴァンゲリオンに乗り、謎の敵「使徒」と闘う物語。「もののけ姫」は平成9年7月に公開された宮崎駿監督作品の長編アニメーション。中高生の支持を受け、配給収入の記録を樹立した。タタリ神が跳梁する混沌とした世界を描く。
- (5) 日渡早紀『ぼくの地球を守って』2巻、99頁、1987年。
- (6) 「りんね」『世界宗教大事典』平凡社、1991年、2050頁。
- (7) リストは、「輪廻」「転生」「生まれ変わり」が主要なモチーフであることに限定して、刊行物やホームページから収集したものである。よって、筆者は過去に刊行されたすべてのマンガを読んだわけではなく、読者がこのテーマのマンガである、という認識の元で挙げられているマンガで、テーマが含まれていることを確認したものである。さらに詳細に比べていけば、作品数はさらに増えると思われる。青年誌は含まない。
- (8) あしべゆうほ(原作:池田悦子)『悪魔の花嫁』1、秋田書店、平成8年、11頁。
- (9) レポートの説明の際には、宗教性が見いだせない場合には、無い旨を記せばよいと指導した。回答は、作品を三つ挙げることにしてあったが、一つしか記述しなかった者、あるいは四つ以上考察した学生もいた。

